

# 北ユーラシアの旧人・新人交替劇

## —ウズベキスタン旧石器遺跡調査(2012~2019年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授・館長  
オタベク・アリプジャンフ ウズベキスタン国立歴史博物館副館長

### Replacement of Neanderthals by Modern Humans in North Eurasia: The Uzbekistan-Japan Joint Prehistoric Research in 2012-2019

NISHIAKI, Yoshihiro Director/Professor, The University Museum, The University of Tokyo, Japan  
ARIPDJANOV, Otabek Vice Director, The Sate Museum of History of the Republic of Uzbekistan, Uzbekistan

北ユーラシアの旧人・新人交替劇—ウズベキスタン旧石器遺跡調査(2012~2019年)—

#### 1. はじめに

私たちホモ・サピエンス(新人)は約20~30万年前のアフリカで誕生し、その後、ユーラシア各地に拡がり、先に展開していた様々な人類集団と交替していった。最終的には先住者が誰もいなかったオセアニアの島々や新大陸にまで居住地を拡げ、今や、地球上で唯一の人類となっている。拡散の過程でどんなドラマがあったのか。研究者のみならず多くの方々の興味を惹きつけてやまない研究課題である。なかんづく興味をそそられるのが、先住集団との関係であるが、アジアの場合はたいへん複雑である。ヨーロッパへの新人進出研究において先住者として考慮すべきは、19世紀から知られているネアンデルタール人のみだが、アジアでは2000年代にはいって続々と未知の集団が発見されている。例えば、フローレス人、デニソワ人、そしてつい最近、ルソン人が報告された。さらには北京原人に代表されるようなエレクトス集団も生存していたらしいから、ヨーロッパとは比べがたい複雑な人類模様が展開していたことになる。

筆者らの調査地、中央アジアにいた先住人類としてわかっているのはネアンデルタール人とデニソワ人である。前者はヨーロッパ、後者は東アジアを中心に分布していた旧人であったから、中央アジアはちょうど両者の分布の交錯地域ということになる。東部アルタイ地方のデニソワ洞窟では、両者の交雑の証拠も見つかっている。そのような旧人世界に新人ホモ・サピエンスが拡散していった際、どんなことが起こったのか、交替劇が完遂するまでのプロセスを調べたい、というのが筆者らの中央アジア研究の背景である。

2012年の下調べをへて、2013年から本格的な調査

にとりくんできた。2020年も現地渡航する予定ではあったが、コロナ禍のため中断を余儀なくされたところである。ここでは、これまでに発掘した遺跡について整理し、研究の現在地を確認することとしたい。踏査した遺跡については割愛し、発掘調査をおこなった遺跡についてのみ言及する。

#### 2. ウズベキスタンにおける発掘調査

##### (1)パシャット遺跡—2013年

2013年には二つの地域で調査をおこなった。一つは、ウズベキスタン中央部の乾燥地帯、ナヴォイ市北方、ヌロタ近郊にあるオアシスである(図1、2)。地元の方から中期旧石器時代の石器を採集したという情報が寄せられたことを受けて出向いたものである。ステップ地帯にもいくつかの湧水地があり、シルクロードの中継点が設けられている。その一つ、パシャットの湧水地を調査対象とした。そこでは確かに、ルヴァロワ剥片や削器など中期旧石器時代の石器群が採集できた。湧水を整備するための工事で掘り出されたものと考えられた。試みに、いくつかのピット発掘を実施したが、文化層にはいたらなかった。分厚いレスの堆積に覆われているものと考えられた。周辺の山地をめぐり、洞窟調査もおこなったが期待する洞窟はみあたらなかったため、ひとまず、この地域の調査は中断することとした。

##### (2)アンギラク洞窟—2013~2015、2018年

同じ年、ウズベキスタン東部のアライ山系においても調査をおこなった。シャフリサーブズ市東方、ザラフシャン溪谷の一角に相当する地域である(図1)。この地域においては、2000年代初頭にアメリカ隊がアンギラクという洞窟を発掘し、ネアンデルタール人ら

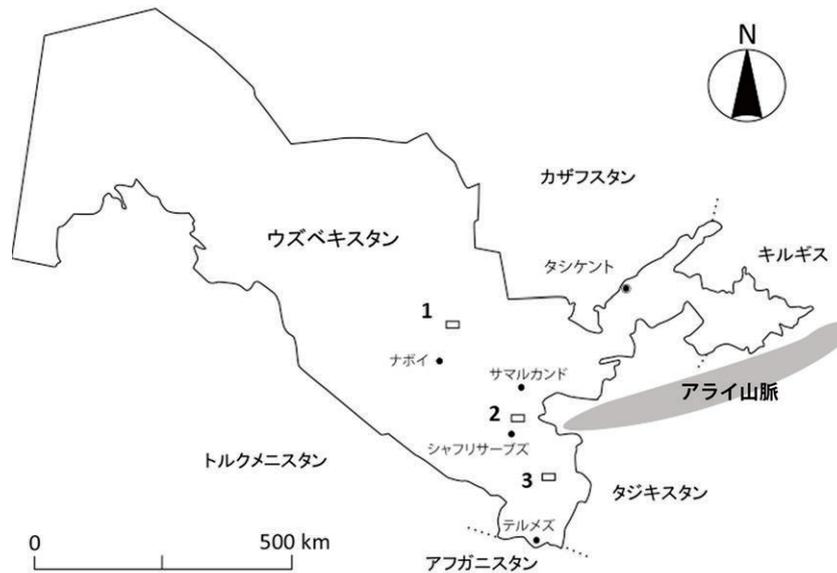


図1 調査地域 1：ヌロタ地区、2：ザラフシャン渓谷、3：マチャイ渓谷



図2 パシャット・オアシス遠景



図3 アンギラク洞窟の発掘

しき人骨と中期旧石器時代石器群を発見していた。詳細な研究は完了していなかったため、その再調査をおこなうこととした。

標高約 860 m の山麓部に位置し、開口部が幅 10 m で高さ 6 m、奥行きは 8 m ほどの小さな洞窟である(図3)。我々の発掘でも豊かな中期旧石器時代文化層が堆積していることを確認できた。そのため、次年度以降も継続調査し、さらには、2018年には年代測定に焦点をあてた再調査も実施した。出土した石器群は確かに中期旧石器時代の特徴を示すものであったが、年代測定の結果は米国籍の見立てとは全く違うものであった。米国籍の放射性炭素年代測定結果は、約3~4万年前という年代を示しており、それをもとに、中央アジアでは西アジアでは後期旧石器時代(ホモ・サピエンスの時代)にはいつてからもネアンデルタール人が生存していたのではないかと述べられていたのである。我々がおこなった OSL 年代測定によれば、7~

8万年前ということになった。すなわち、この遺跡の居住層は放射性炭素年代法で測定できる範囲よりもはるかに古いことを示した。人骨化石をともなう地層が明瞭に年代測定された中期旧石器時代遺跡としては当地初の成果であり、中央アジア交替劇研究に大きな貢献をなしたものと考えられる。

### (3)マチャイ洞窟—2016年

次に調査地に選んだのはウズベキスタン南東部、タジキスタンとの国境近くにあるマチャイ渓谷である(図1)。仏教遺跡が多数あることで著名なテルメズ市の北東約 120 km にある山岳地帯にある。ここを選んだのは、1930年代に A. オクラドニコフが中央アジア初のネアンデルタール人化石を発掘したテシク・タシュ洞窟があるからである。また、もう一つ、既知の洞窟遺跡があった。マチャイ洞窟である。オクラドニコフはここにもネアンデルタール時代の石器がありそうだと述べていたが、1970年代に U. イスラムフが実



図4 カイナル・カマル岩陰の発掘

施した発掘によれば中石器時代の遺跡であるとされていた。

この点を確認すべく、マチャイ洞窟の再発掘を試みた。しかしながら、ほとんどの堆積物は掘り尽くされているようであった。また天井崩落による巨石の堆積が著しく、最下層まで掘り進めることはできなかった。

#### (4)カイナル・カマル岩陰—2016～2019年

テシク・タシュやマチャイ洞窟以外にも遺跡があるのではないかと考えて流域で数十の洞窟を踏査した結果、カイナル・カマルと呼ばれる岩陰を発見した。タンゲ・サルトと呼ばれる峡谷の水源に面した岩陰遺跡であって、幅は約70m、奥行きは最大で約5mある。三つのトレンチを設けて発掘調査をおこなった(図4)。最深部にまでいたったのはトレンチCで、地表下約8mまで掘り進めたがなお、岩盤にはいたっていない。放射性炭素年代によれば、遡っても1万数千年前、主たる居住時期は完新世初頭以降の遺跡であることがわかった。我々が探していた旧人・新人交替期の研究に直接かかわる遺跡ではなかったわけだが、後期旧石器時代から中石器時代、さらには新石器時代、青銅器時代をへてイスラム時代にいたる連続的居住痕跡が得られたことの意義は大きい。

とりわけ大きな成果は、二点ある。第一は、中央アジア西部における押圧剥離石刃製作技術の出現年代をめぐる議論についてである。この技術は東北アジアの後期旧石器時代新人が2万数千年前に考案したものとされるが、その西方への拡散の実態については証拠が乏しく具体的に描き切れていない。カイナル・カマルの層位的証拠は、中央アジア西部の押圧剥離技術出現年代の定点を提供するはずである。第二は、当地への食料生産経済の導入過程についてである。標高が1300m以上の溪谷地帯であるから、穀物栽培は考え



図5 テシク・タシュ洞窟の発掘

にくい。が、牧畜経済の導入時期の研究に貢献するであろう。西アジア起源の経済システムが中央アジアにどのように拡散し、在地の狩猟採集経済と交替したかという問題である。東西文化が交錯する中央アジアにおける完新世の交替期研究は、旧人・新人交替期の研究にも示唆を与えるに違いない。

#### (5)テシク・タシュ洞窟—2019年

さて、2019年にはテシク・タシュ洞窟の再発掘を実施した(図5)。この洞窟は、マチャイ溪谷の上流部、標高は約1850mの地にある。ネアンデルタール人男児の化石を見つけた1938～39年のA.オクラドニコフの大規模発掘で遺跡堆積物は全て掘り尽くされたとされているが、果たしてそうなのか、実際に調べて見ないとわからない。そのため、文献調査、地形測量をふまえて、未掘部が残存していると思われた洞窟西部テラス近くで試掘をおこなった。

オクラドニコフの報告書にあるように、地表下約1.5mで無遺物層である礫層に到達した。石器はわずか一点しか出土しなかったため、確実なネアンデルタール人居住層の同定にはいたらなかったが、その石器は完新世の特徴を示していた。あわせてタシケント博物館において1930年代の発掘石器の再調査を実施したところ、それには押圧剥離技術、すなわちネアンデルタール人とは全く関係のない技術を示す石器が含まれていることが明らかになった。すなわち、この洞窟には新人も居住していたということである。ネアンデルタール人が製作した石器については論文をまとめることができたが、新人の石器についても今後、出版していく所存である。

### 3. おわりに

これまでの調査を振り返ると、1箇所に腰を落沉着

けることなく、矢継ぎ早にフィールドを移動してきた印象をもつ。筆者がかつてシリアで経験したドゥアラ洞窟やデデリエ洞窟調査のように、拠点遺跡を中心にした長期的な調査体制はまだ築けていない。筆者らは人骨化石が見つかるような洞窟遺跡を志向しているのだが、ふさわしい大型洞窟が見つかっていないことが主たる理由である。活発な地殻変動、テクトニクスが続くこの地域では更新世の洞窟がなかなか良好には保存されないという事情があるのだと推定している。その意味では、カイナル・カマル岩陰遺跡はウズベキスタンで久々に発見された旧石器遺跡として貴重である。また、アンギラク、テシク・タシュという同国で数少ないネアンデルタール人骨出土遺跡を再調査し、出土遺物を再研究する機会を得たことは、きわめて幸甚といわねばならない。成果の一部は出版しているが、なお、多くの未公開データを得ている。コロナ禍による現地調査の中断を機にそれらを取りまとめ、斯界に貢献していく所存である。

この報告は文部科学省科学研究費補助金新学術領域

『パレオアジア』研究計画研究「アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築」(課題番号 16H06408、研究代表者：西秋良宏)の成果の一部である。

#### ■参考文献(昨年分に追加)

- ・ Nishiaki, Y. 2020 Kaynar Kamar, a new Mesolithic-Neolithic site in south Uzbekistan. Special Seminar. Berlin Free University, Berlin, February 20, 2020.
- ・ Nishiaki, Y. and O. Aripdjanov 2020 A new look at the Middle Palaeolithic lithic industry of Teshik Tash Cave, Uzbekistan, west Central Asia. *Quaternary International* <https://doi.org/10.1016/j.quaint.2020.11.035>
- ・ 西秋良宏・O. アリプジャノフ・O. エンゲシェッド・B. セイフライエフ・仲田大人・新井才二 2020 「北ユーラシアの旧人・新人交替劇—第7次ウズベキスタン旧石器遺跡調査(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』52-55頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西秋良宏 2021 「アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築—2020年度の取り組み」『アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築5(「パレオアジア」A01班2020年度研究報告)』西秋良宏編：1-9頁。